

海外事務所だより

シンガポール事務所

相互に通う感謝の気持ち ～2011年の日泰関係～

シンガポール事務所所長補佐 伊藤 裕子（浜松市派遣）

2011年の日本とタイ

2011年3月11日、日本は大きな災害に見舞われました。東日本大震災では、とりわけ津波による被害の大きさに世界中が震撼し、様々な国から多くのあたたかい支援が日本に寄せられました。日本国内でも支援の輪は広がり、大きな被害を受けた東北地方は、復興へ向けて一歩ずつ進んでいます。

その東日本大震災から、約半年。2011年秋、東南アジアきっての親日国家であるタイ王国を、50年に1度と言われる記録的な大洪水が襲いました。タイ北部を起点とした洪水は、水を貯えながらじわじわとタイ中部に迫り、世界遺産で有名な観光地・アユタヤ地域に大きな被害をもたらし、タイに進出した多くの日本企業も同時に大きな被害を受けました。その勢いは止まるところを知らず、タイ王国の首都・バンコクに迫り、首都機能にも洪水の危険が迫りました。首都バンコクの水も引き、日常生活を取り戻したタイ王国では、今後同様の被害を繰り返さないための対策に取り組んでいます。

相互支援

これまで、日本は国際社会において支援をする側に立つことがほとんどでした。しかし、東日本大震災の起こった2011年、日本は世界一の被支援国となりました。各国から寄せられた支援の中には、もちろんタイ王国からの支援も含まれていま

した。タイ王国からの東日本大震災の被害に寄せられた支援は、金額にして総額約48千万バーツ（日本円にして約12億円）に上りました（在タイ日本大使館2011年8月時点）。この中には、タイ王国のスラム地域からの寄付なども含まれています。「日本への支援としては、大した金額にならないかもしれない。でも、何かせずにはられない」——。そんな気持ちが込められた支援に、感謝の気持ち以外、返せるものはありません。

一方、7月から兆しを見せていたタイ王国の洪水の被害が大きくなった9月、東日本大震災からわずか半年の日本では復興が大きな課題となっていました。自らも復興の只中にある日本で、当然のようにタイ王国の洪水被害への支援活動が行われました。義捐金だけでなく、JICA調査団が派遣され、復興プロジェクトも実施されます。また、東日本大震災で大きな被害を受け、同時に世界中から多くの支援を受けた宮城県では、個別にタイ王国政府および首都・バンコクへ物資輸送支援を行っています。東日本大震災の際、世界中から受けたあたたかな支援への感謝の気持ちを、まずは同じように自然災害に苦しむタイ・バンコクへ示したいと考えてのことでした。宮城県以外にも、自治体単位では、東京都、福岡県などの自治体が個別にお見舞金を送るなどの支援を行いました。

国際園芸博覧会での復興PR展示

2011年、日本とタイ王国は被災した災害の種類

こそちがいますが、共に自然災害により被災し、支援し合う関係にありました。そのタイ王国から寄せられた数々の支援に感謝の気持ちを伝えるとともに、東日本大震災から立ち直ろうとしている被災地域の復興をPRするため、当事務所では、タイ王国北部の都市・チェンマイで2011年12月14日から2012年3月14日まで行われた国際園芸博覧会（Royal Flora Ratchapruék 2011）のジャパン・ウィークに被災地域の復興PRパネルを展示しました。

ジャパン・ウィークは、2012年1月14日から22日までの9日間で、博覧会場内のExpo Centerにて和太鼓演奏や生け花ワークショップなど、日本にちなんだイベントが行われました。当事務所の復興PRパネルは、在チェンマイ日本国総領事館の協力を得て、Expo Centerの入り口に展示され、付近では東北地方をPRするパンフレットを配布しました。はじめの2日間は当事務所スタッフがパネル付近に常駐し、来場者にパネルの説明を行いました。それ以降は国際園芸博覧会の主催団体の1つでもあるタイ農業省の方に常駐していただき、同様の説明をしていただきました。

復興PRパネルは被災地域の各支部から素材となる写真を提供いただき、タイの方への感謝の気持ちを込めたメッセージを掲げました。パネル側面の白地のスペースには、展示を見た来場者から日本へのメッセージを書いていただきました。こ



タイ チェンマイ市

のメッセージ欄は、最後にはメッセージの書き込みが困難になるほどのメッセージで溢れました。内容は、「がんばって日本」「応援している」という内容のものばかりで、中には「日本に行きたい」というものもありました。

また、パネル展示の説明に応じていただいたメッセージを、少しだけ紹介したいと思います。

- 「大方大丈夫だと思いますが、食べ物少し怖いですが、日本には災害に負けず、強い日本であってほしいと考えています」(30代・男性)
- 「訪日ツアーが安くなっているので、この機会に旅行したいと考えています」(40代・女性)
- 「タイの洪水後、JICAによる復興プログラムが組まれたと聞いており、本当に感謝しています」(50代・男性)
- 「大変な震災に心が痛み、3日間泣きました。7月にはタイの北部も洪水の兆しが見え始めて大変でしたが、互いに助け合う日本とタイの関係は素晴らしいと思います」(50代・女性)
- 「地震が起きたとき、東京にいて電車に乗っていました。日本の人たちは外国人の自分に対しても、避難指示などきちんと世話をしてくれたので、感謝しています」(20代・女性)

ジャパン・ウィークの9日間にパネル展示を訪れたのは、延べ1万5,000人。平均して、毎日1,600人以上という、非常に多くのお客様に訪れていただけたように感じます。それだけタイ王国では日本への関心が高いのかもしれない。

相互に通う感謝の気持ち

パネル展示に足を止めてくれたタイ人の多くが、東日本大震災の際、日本の被害に心を痛めてくれた方でした。そして、パネル展示の趣旨と感謝の気持ちを伝えたい私たちに、多くの方が「お互い様ですよ」と言ってくれるのです。私たちが東日本大震災に際して寄せられた支援に感謝して「ありがとう」と伝えると、「大丈夫ですか」と日本の状況を案じるのではなく、「どういたしまし



復興PRパネル (写真は福島県)

て」でもなく、彼らもまた、「ありがとう」という言葉で返してくれました。同じ年に起こった水害への支援に、また、少し前ではスマトラ島沖地震の際にタイ南部を襲った津波被害への支援に対しての感謝の言葉でした。感謝の言葉を伝えて、同じように感謝の言葉で返してもらえる——。こんなに素晴らしいことはありません。

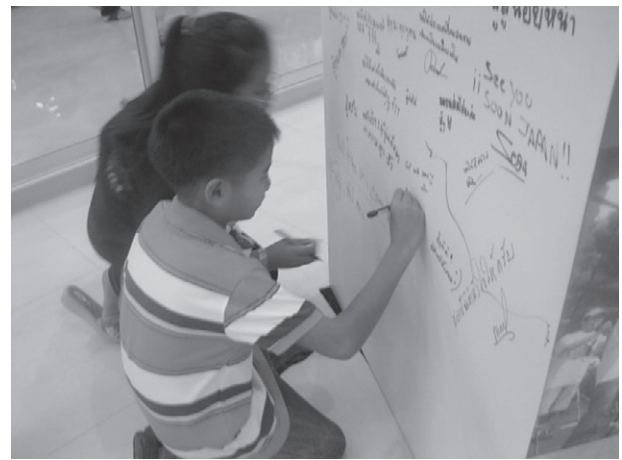
時間の経過とともに

東日本大震災から、1年が経ちました。いまだ原発事故への対応は続き、被災地域では、仮設住宅での暮らしが続く厳しい状況にあるものの、私たちは、復興に向け、着実に歩を進めています。タイ王国から日本への観光客に関して言えば、現在、ほぼ震災前の水準にまで回復し、2012年1月の訪日旅行者数は1万2,100人（日本政府観光局2012年2月17日時点・推定値）で、前年比プラス6%という状況です。この回復ぶりには、タイの人々が日本へ共感を抱いてくれていることも影響しているのではないかと思います。

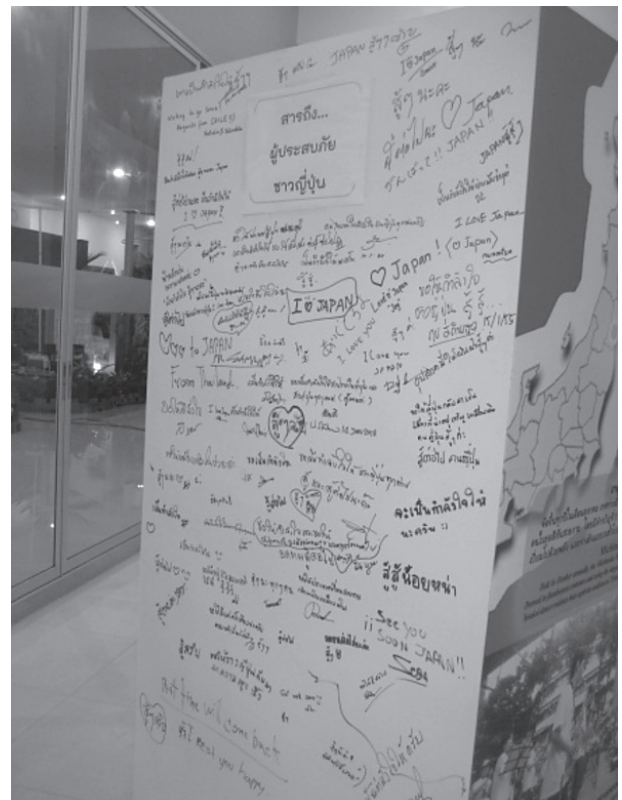
震災から4か月後の2011年7月、マレーシアで同様の復興PRを行いました（詳細は「自治体国際化フォーラム2011年10月号」掲載）。そのときと比べると、今回のPRでは、震災後の日本の状況に対して、懸念や心配よりも楽観視する感想が多かったように思います。もちろん、被災地域の状況を確認したいという声もあり、求められている情報が行き届いていない面もあるかもしれませ

ん。しかし、「日本は大丈夫ですか」に比べて、「日本は大丈夫だろう」という声が増えたと感じました。

これからも、時間の経過とともに、日本は復興を進め、その情報や様子もゆっくりと世界中に伝わっていくはずですが、当事務所では、今後も各種事業を通じてそれらの情報を的確に、根気よく伝えていくことで、地域のサポートを続けていきたいと思えます。



小さな子どもからのメッセージ



パネルの側面いっぱい寄せられたメッセージ